

授業研究論文

道徳授業案

「射殺された極悪人が回想した 人生の一場面を考える」

宮崎 正康 *

Class Plan for “Nefarious Villain Shot Dead”

MIYAZAKI Masayasu

In this class junior high school students examine a nefarious villain who kills a lot of people, deprives them of money, and is shot dead by government officials at the end.

The cruel event relating to such a nefarious villain causes people deep and intense sorrow as well as anger.

It seems that deep and intense feelings of sorrow and anger remain even if the nefarious villain is shot dead.

How is the feeling of deep and intense sorrow and anger relieved?

Has the nefarious villain shot dead expiated his crimes?

キーワード: 極悪人、深い激しい悲しみや怒り、罪の償い

Keywords: nefarious villain, deep, intense sorrow and anger, expiated his crimes

1. この道徳授業について

この道徳授業は、小学校6年生から中学生・高校生を対象に考えている。また大学生にも授業出来る。

この授業で取り上げるのは、多数の人々を殺し、お金を奪い、最後に役人たちに射殺される極悪人である。こうした極悪人に関わる凄惨な出来事は、人々に深く激しい哀しみや怒りなどの感情を引き起こす。極悪人は射殺されたとしても、深く激しい哀しみや怒りの感情は、残っていくと思われる。

この深く激しい哀しみや怒りは、どうすれば癒やされたり、鎮魂されたりするのだろうか。

射殺されてしまった極悪人は、なにか罪のつぐないを残していることがあるのだろうか。

山下和美は、「由利香」（『不思議な少年4』講談社、2005年）というマンガ作品で、連続殺人を続ける冷酷な女性を描いている。不思議な少年は、この女性が警官に射たれ、死ぬ直前に回想する人生のなかに、女性の楽しい中学時代を見つける。

連続殺人は許されるはずが無いが、女性の楽しい中学時代の描写は、「癒やし」「鎮魂する」力を持っているように、宮崎には思えた。

この道徳授業では、山下和美が描写した「由利香」を、極悪人の盗賊のハンズに置き換えて、射殺された極悪人の人生の一場面を児童に考えてもらいたいと思う。

「中学校・新学習指導要領・生きる力・第3章道徳・第2内容・4.主として集団や社会との関わりに関する事」の(1)は、「法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、自他の権利を重んじ義務を確実に果たして、社会の秩序と起立を高めるように努める」とされている。

「小学校・新学習指導要領・生きる力・第3章道徳・第2内容〔第5学年及び第6学年〕・4.主として集団や社会との関わりに関する事」の(1)は、「公德心をもって法やきまりを守り、自他の権利を大切にしながら進んで義務を果たす」とされている。

この道徳授業で考えるのは、(宮崎の道徳授業案「重大な罪を犯した人は、どうすれば罪をつぐなえるか?」と同様に)、守るべき「法やきまり」を大きく踏み外してしまった場合である。

「法やきまり」を大きく踏み外すような重大な出来事に出会った人々は、どのように癒やされ、鎮魂されるのだろうか。また重大な罪を犯し、そのまま処刑されてしまった極悪人は、なにかつぐないができるのだろうか。

なおこの道徳授業は、宮崎正康「道徳・言語力を育成する授業の研究ポイントー説話教材をじっくり考えさせ発言させるー」（明治図書『学校マネジメント No.619』2008年4月号 pp.38-39）に続く道徳授業である。『学校マネジメント』の宮崎の道徳授業を実践した後に、同じ生徒（児童）たちにこの道徳授業を実践してほしい。

2. 本時のねらい

射殺された極悪人の人生のなかの、日常的で普通の人間的な楽しい場面について、児童が考える機会を持つこと。

3. 資料・準備

①資料・・・宮崎が作成。

参考文献：山下和美「由利香」（『不思議な少年4』講談社、2005年、pp.3-52）

②授業ノート（本稿では省略するが、B4の用紙。本時のテーマを書く。授業評価（授業に満足・普通・不満、など）のアンケートを付加する。）

4. 授業の展開

資料と授業ノート（本稿では省略）を配付して、教師が資料をゆっくり読む。

資料

ハンスは、盗賊たちの首領（ドン）になっていきました。

ハンスの大胆な盗みや殺人に引きよせられる手下が、増えていったのです。

あるときハンスと手下たちは、山の中の聖職者が修行する修道院に行きました。

門は大きく開いていて、緑のトカゲがゆっくりと這っていました。

緑のトカゲは、「入れない、入れない、門の中には入れない」と言いました。

ハンスはじゃまされるのが大嫌いで、緑のトカゲをふみつぶそうとしましたが、トカゲは逃げてしまいました。

ハンスは、トカゲに逃げられたことで首領（ドン）の威厳が傷つけられたと感じて、修道院のなかをひどく荒らしまわりました。

しかし聖職者の修行する修道院は、つつましかで、お金も食糧もありませんでした。ハンスはいらだて、不満げにしていた手下のひとりの背中をけりつけました。

翌日ハンスと手下たちは、大きな館に押し入って、住民たちを多数殺して、多くのお金や肉や酒を手に入れました。

ハンスと手下たちは、肉を食べ酒盛りをしました。笑い声が絶えない中で、ハンスは急に手下たちがかわいらしく思えてきました。ハンスは、自分がこれらの手下たちを、食べられるようにしてやっているのだと思いました。

政府は、ハンスたちを、大金持ちの館から財宝をうばって、貧しい人々に配る義賊（犯罪者ではあるが、民衆の味方をし、民衆から支持される盗賊）であると言いはじめました。

このうわさを、手下のひとりが聞きつけて、ハンスに伝えました。政府は、自分たちと手を組みたがっていると、その手下は、ハンスにうったえました。

ハンスは、この手下の後ろに大きな黒いものが見えて、総毛立ち（ぞっと）しました。

ハンスは、この手下をなぐりつけ、けり続けました。ハンスはうまく説明できず、力を使うしかなかったのです。

翌日、ハンスがおきた時、手下たちはみんななくなっていました。

手下たちは、政府の役人たちとの宴会の最中に、全員つかまって、そのまま処刑されました。

ひとりになったハンスのかくれ家の窓の外から、小鳥がハンスをみつめていました。

ハンスは、小鳥の目をみて、なぜか昔、教会にいっしょに行った女性の目を思い出しました。しかしハンスの記憶はあいまいで、この女性を十分思い出すことはできませんでした。盗賊団をつくる前に、ハンスが恋人のふりをして利用した女性は何人もあったのです。

政府は、盗賊たちを多数処刑したことで、村人たちの支持を高めました。

ハンスは、手下たちがみんな処刑されたという村人のうわさを聞きました。

ハンスは、自分が力と財宝で引きつけて、手下たちを盗賊と殺人の道に引き入れて、そのあげくにみんなころしてしまったのかもしれないと感じました。

政府の役人たちは、処刑した手下たちから情報を得ていて、ハンスの隠れ家にせまっています。

ハンスは、その気配に気づきました。

鉄砲を持ち、隠れ家を出たハンスを止めるかのように、木の枝がハンスの服に引っかかりま

した。

ハンスがかまわず足を踏み出して服を引くと、木の枝がパキッと音をたてて折れました。

役人たちは、この音でハンスに気づきました。

ハンスは、草深い地形をえらんで逃げのびようと思いました。草をかきわけたハンスの目の前に、せいしよくしや しゆぎよう しゆうどういん聖職者の修行する修道院があらわれました。門は閉ざされていて、門の前にみどりのトカゲがゆっくりと這っていました。

ハンスはどちらに逃げようか、迷いました。

役人たちがいっせいに射撃しました。役人たちは、ハンスが武器を持っていれば、即座に撃ち殺して良いと命じられていたのです。

小鳥がハンスの最後を看取りました。

小鳥は、ハンスが一生を急速度で回想するのを見ていました。

ハンスの回想のなかに、一瞬光る場面がありました。

ハンスの母は、ハンスが幼い頃に亡くなっていて、小さなハンスは父とふたりで貧しい生活をしていました。父のつくる靴は流行おくれで、いつも安く買ったたかれるか、まったく売れないかでした。

父はいつもいらだっていて、毎日小さなハンスをなぐりつけました。

しかしある日めずらしく、父のつくった靴が全部高く売れました。父は、大きないのししの肉と酒を買って帰ってきました。

父と小さなハンスは、いのししの肉をおなかいっぱい食べました。父は酒を飲んで笑っていました。ほんとうにめずらしい夕食でした。小さなハンスは、「おいしいね」と父に話しかけました。酒を飲みながら父は笑っていました。

小鳥は、一瞬光る場面を見届けて、飛び立って行きました。

(『ヨハンナ・ローゼンベルク (仮名) の7つの物語』より)

教師は、範読後、次の指示を行う。

指示1 この物語を読んで、気づいたことを、授業ノートのAの枠の中に書きなさい。気づいたことは、分かったことや思ったことや考えたことです。
7分間です。

教師は「学習のめあて」と「学習メニュー」を黒板に貼る

学習のめあて	
「資料を読んで、極悪人の人生の一場面を考える。」	
学習メニュー	
はじめに・範読	5分
課題1	17分
課題2	5分
課題3	18分
(課題4	6分)
まとめ	5分

教師は、タイマーを課題1の個別学習7分にセットする。

(自律学習ができるクラスでは、タイマーは不要である。「学習メニュー」は実際の時間を記入し、生徒(児童)が教室前方の時計で自ら時間管理をする。以下同様。)

教師は、あまり移動せず前方から、鉛筆が動いていない生徒(児童)を確認しておく。

7分後、次の指示をおこなう。

指示2 自由にグループをつくって、意見交流しなさい

友だちから新しい意見が出たら、授業ノートのBの枠に、書き加えなさい。

5分間です。

自由なグループでの意見交流になれていないクラスでは、4人の学習班による意見交流でも良い。(以下同様。)

次の指示は、グループでの意見交流のルールとして、普段から周知させておく。

指示3 友だちの意見を否定してはいけません。友だちの意見を大切にしてください。

自分の意見を取り下げて、友だちの意見に乗り換えてはいけません。

自分の意見を大切にしてください。

グループで意見をまとめてはいけません。

自分の意見も、友だちの意見も大切に、意見交流して下さい。

教師は、クラスが見渡せる位置に立って、グループで学習が行われているか、あるいは生徒(児童)の鉛筆が動いているか、確認する。

1人で、分からなそうにしている生徒(児童)がいれば、その生徒(児童)と近くのグループに、学び合いをしなさいと呼びかける。その生徒(児童)がグループに参加するのを確認する。

意見交流が進まないグループがあれば、教師はそばに行き、「他のグループと意見交流しなさい」と促す。生徒(児童)たちが動くのを確認する。

5分後、座席を、教壇に向かっておおよそ半円形にする。

生徒(児童)の挙手による相互指名で発言を求めていく。相互指名がとぎれば、教師の許可を得て、生徒(児童)が個別指名しても良い。

生徒(児童)の発言は、名前とともに板書する。板書は、授業ノートのCの枠にすばやく書き写しなさいと指示する。(学級のルールとしておく。)

資料から読み取れない空想の発言は、「資料のどこから読み取れますか」と聞き直し、資料にもとづくように求める。

(予想される生徒(児童)の発言)

- ・クララの話の続きだ。クララに放火させて逃げた男の話だ。
- ・修道院の前に這っていた緑のトカゲが、「入れない、入れない、門の中には入れない」と言ったのが、何だか分からない。ハンスは、修道院に入って、荒らしている。
- ・緑のトカゲは、未来を予言してしゃべっている。
- ・ハンスは、多くの人を殺して、お金などを盗む盗賊団のドンになって、本当に極悪人だと思う。
- ・極悪人のハンスでも、手下がかわいいみたい。
- ・政府が盗賊団を義賊と呼んでだまそうとしているのが、手下たちに分からないのが不思議だ。手下たちは、本当は盗賊団をやめたがっていたのかもしれない。
- ・小鳥は、クララの生まれ変わりのよう。
- ・修道院の門は閉ざされていて、結局ハンスは入れなかった。
- ・小鳥のクララが、ハンスが一生を回想するのを見ることが不思議だが、面白い。
- ・小さなハンスと父が楽しい夕食をする場面があって、ほっとした。
- ・私も、救われるような気持ちになった。など。

生徒(児童)の「○○○が分からない」などといった発言については、「○○○?」と、?をつけて板書する。?がたくさん板書されてもかまわない。

5分たてば、あるいは板書が2列目の下までくれば、生徒(児童)の発言を止める。

説明1 いろいろな意見が出ました。疑問も出ましたが、自分の疑問として、今は大切にしておいて下さい。

この資料は、つくられた物語なので、深く議論を重ねて行っても、書かれていないことを想像していくことになると思われる。

また国語の授業のように、表現や意味などを分析していく必要は無い。

生徒(児童)の疑問は、疑問として大切に、先に進む。

発問1 小鳥が見つけた、小さなハンスと父が食事をする場面について、どのように感じましたか。

指示4 授業ノートのDの枠に書きなさい。2分間です。

「指示1」についての生徒(児童)の発言のなかで、この場面について、「ほっとした」などという感想を述べた生徒(児童)があれば、この生徒(児童)の発言を指し示しながら、次のように発問する。

「小鳥が見つけた、小さなハンスと父が食事をする場面について、○○さんは、「ほっとした」と感想を述べましたが、他の人はこの場面についてどのように感じましたか。」

2分たてば、生徒（児童）の挙手による相互指名で発言を求めていく。相互指名がとぎれれば、教師の許可を得て、生徒（児童）が個別指名しても良い。

教師は板書し、生徒（児童）は、授業のノートのEの枠に書き写す。

（予想される生徒（児童）の発言）

- ・私もほっとした。
- ・なぐさめられる感じがする。
- ・少しなごむ。
- ・罪の無い子どもの時期には、こんなこともあるように思った。
- ・わざとらしい。
- ・作り話だなと思った。
- ・何も感じない。など。

板書が、1列の黒板の下まで行ったら、生徒（児童）の発言を止める。

説明2 いろいろな意見が出ましたが、「なぐさめられる」「なごむ」といった意見もできました。ハンスは、人生の中で、少しでも他の人が「なぐさめられる」「なごむ」と感じる場面を持っていたこととなります。

発問2 ハンスは、人生の中にこのような場面を持っていることで、少しでも罪をつぐなっていることになりませんか。

指示5 授業ノートのFの枠に、自分の考えを書きなさい。3分間です。

教師は、あまり移動せず前方から、鉛筆が動いていない児童を確認しておく。

3分後、次の指示する。

指示6 さっきと同じように、自由にグループをつくって、意見交流しなさい。友だちから新しい意見が出たら、授業ノートのGの枠に、書き加えなさい。5分間です。

生徒（児童）の自由なグループでの意見交流に関する教師の指導は、先ほどと同じ。

5分後、座席を、教壇に向かっておおよそ半円形にする。

生徒（児童）の挙手による相互指名で発言を求めていく。相互指名がとぎれれば、教師の許可を得て、生徒（児童）が個別指名しても良い。

生徒（児童）の発言を板書する。生徒（児童）はHの枠に書き写す。

（予想される生徒（児童）の発言）（これらの発言がすべて出されると予想しているわけではない。また生徒（児童）の発言は、もっと素朴な言い方になると思われる。）

- ・私はたしかになぐさめられた。ハンスが人生でこうした人間的な場面を経験したことは、わずかではあるけれど、罪をつぐなっていることになるかもしれない。
- ・「ヨハンナ」が、そういうふう感じさせるように作っただけだと思う。
- ・「ヨハンナ」は、ハンスの魂を静めているように物語を作っていると感じる。それが私たちの気持ちをなごませる。小さなハンスと父の食事の場面は、救われた感じがする。
- ・「罪のつぐない」になっているはずは無い。多数の被害者や被害者の遺族たちは、ハンスが人生のなかでこうした人間的な楽しい場面を経験したことなど、わからない。またわかったと

- しても、被害者の遺族たちが、ハンスを許したり、ハンスになごみを感じることは 無いと思う。
- ・ハンスは、射殺されて処罰を受けている。残されたハンスの人生の一場面が、私たちをなぐさめることはあり得ると思う。また、ハンスの魂を静めることもあると思う。
 - ・そもそも小鳥が、ハンスの最後の人生の回想を見ているなどということがありえない。全くの作り話と思う。
 - ・小鳥の話になっているけれど、ハンスの小さい頃の話を知っている人がいれば、小さいハンスと父の食事の場面は他人に伝わっていくと思う。同じ効果があると思う。
 - ・日常的で普通の人間的な楽しいことを1度でも経験していたら、罪がつぐなわれるなどと言っていたら、すべての極悪人が罪をつぐなって許されてしまうかもしれない。とてもおかしな話と思う。
 - ・この話は、日常的で普通の人間的な楽しいことが大切なのだと言っているように思う。日常的で普通の人間的な楽しいことは、極悪人にとっても罪のつぐないになるかもしれないくらい大切なのだという話だ。
 - ・人生の、日常的で普通の人間的な楽しい一場面は、一場面として大切と思う。しかしそれと極悪人の罪のつぐないになるかは、全く別の話と思う。この2つをくっつけて考えるからおかしくなる。
 - ・「ヨハンナ」の物語は、前回の話もそうだったが、今回の話も自己弁護のように思える。感じは良くない。など。

教師は、これらの「予想される生徒（児童）の発言」のなかの特定のものを、生徒（児童）に発言させようと誘導してはいけない。生徒（児童）の自然な発言にまかせる。

授業が残り10分くらいになれば、生徒（児童）の発言の流れを考えて、今後の授業展開を決める。

(1) このまま生徒（児童）の発言を続けていって、十分内容が深まっていくと考えられる場合。

（あるいは授業の進行が遅れていて、時間の余裕が無いと考えられる場合）

このまま生徒（児童）の挙手による相互指名で発言を求めていく。

発言が途切れれば、「友だちの意見に付け加えたり、友だちに聞きたいことはありませんか」と問う。

授業ののこりが5分、6分になれば、生徒（児童）にまとめを書かせる。

(2) 補助発問をして、問題をしばってさらに深く考えさせたほうが良いと考えられる場合。あるいは、発問2に、否定的な意見ばかりが続く場合。

生徒（児童）の発言のなかに、生徒（児童）たちに深く考えさせるのに適切なものがあれば、その発言の板書を四角く囲って、「この〇〇さんの発言について、どう考えますか」と問う。

生徒（児童）の発言に適切なものがなければ、次の補助発問をする。

補助発問 「ハンスは、射殺されて処罰を受けている。残されたハンスの人生の一場面が、私たちをなぐさめることはあり得ると思う。また、ハンスの魂を静めることもあると思う」という意見について、どう思いますか。

指示 授業ノートのIの枠に書きなさい。2分間です。

この後、いままでと同じように自由なグループで意見交流する。さらに余裕があれば一斉授業で

生徒（児童）の発言を求める。

残り5, 6分くらいになれば、「次の観点の中から、自由に選んでまとめを書きなさい。まとめは裏に書きなさい」と指示する。

- ①ハンスの物語について、自分の考えを書きなさい。
- ②友だちの発言をとりあげつつ、「極悪人が人生の中に、日常的で普通の人間的な楽しい場面を持っていることで、少しでも罪をつぐなっていることになる」という意見について、自分の考えを書きなさい。
- ③自分の意見が変わった場合は、変わった意見と、変わった理由を書きなさい。

このまとめの観点は、あらかじめ紙に書いておいて黒板に貼る。

教師は、授業ノートを集めて、生徒（児童）のまとめのすべてを学級通信にして、後に生徒（児童）に配布する。

また授業の最後の板書の全体をデジカメなどで写しておいて、学級通信に掲載して、生徒（児童）に配布する。授業の全体を児童に返す。

まとめ以外でも、生徒（児童）の興味深いノート発言があれば、学級通信に記入する。生徒（児童）がノート発言したハンスの物語について「気づいたこと」も、同様に学級通信にして配布する。生徒（児童）は、物語についても、多くのことを思い、考えている。

授業の後で、「みどりのトカゲが、「入れない、入れない、門の中には入れない」と言ったが、なぜこんなことを言ったか分からない」と生徒（児童）が聞いてきたら、教師は、「友だちと相談して考えてみなさい」と答える。教師は教えない。

ただし、「ヨハンナ・ローゼンベルク（仮名）というのは何ですか」と生徒（児童）が聞いてきたら、「仮名というのは、この話を作ったのが、ヨハンナでは無いということです。この資料は道徳授業のための作られたものです。」と答える。

【おわりに】

この道徳授業は、回答がたいへん難しい問題を生徒（児童）に考えさせるという型の道徳授業である。

「極悪人が人生の中に、日常的で普通の人間的な楽しい場面を持っていることで、少しでも罪をつぐなっていることになる」という考えは、ほとんど成立するとは思えない。

しかし山下和美は、「由利香」（『不思議な少年4』講談社、2005年）で、連続殺人を続ける冷酷な女性が警官に射たれ、死ぬ直前に回想する人生のなかに、不思議な少年が付き添って、女性の楽しい中学時代を見つけるという物語を描いている。連続殺人は許されるはずが無いが、女性の楽しい中学時代の描写は、「癒やし」「鎮魂する」力を持っているように、宮崎には思える。

宗教的に考えても、「極悪人が人生の中に、日常的で普通の人間的な楽しい場面を持っていることで、少しでも罪をつぐなっていることになる」という考えは、受け入れられそうに無い。

この道徳授業のハンスの物語の修道院も、門を閉ざしている。

極悪人のハンスは、悔い改めておらず、信仰をもっておらず、「南無阿弥陀仏」などといった口称念仏も称えていない。

ただ日本の浄土宗の開祖の法然は、極悪人ハンスが人生の中に、日常的で普通の人間的な楽しい場面を持っていたことを聞き、小鳥＝クララが心を込めて極悪人ハンスのために囀れば、ハンスは

極楽往生すると、説いたかもしれない。「悪人往生」「女人往生」を説き、自らの教説を一枚に要約した「一枚起請文」を韋提希夫人（= 法然の亡き母。梅原猛説）に渡した法然なら、そのように説いたかもしれない。

また本覚思想は、すべての人や生き物に仏性（一切衆生悉有仏性）があるとする。小さなハンスと父の食事の場面は、ハンスや父の仏性が顕現した瞬間と言えるかもしれない。

さらにこの考えを推し進めれば、ハンスや父の仏性が顕現した瞬間を見たり聞いたり知ったりして関わったすべての人は、成仏するという思想に拡張されていくかもしれない。

ごくわずかであろうが、「この話は、日常的で普通の人間的な楽しいことが大切なのだと言っているように思う。日常的で普通の人間的な楽しいことは、極悪人にとっても罪のつぐないになるかもしれないくらい大切なのだという話だ」と、極悪人ハンスの物語を読み解く生徒（児童）がいるかもしれない。

こうした発言があれば、素晴らしいことである。

この発言の内容は、ハンスの物語に含まれている、そして山下和美の「由利香」に含まれている、もうひとつのテーマあるいはメッセージと言えるかもしれない。

しかし教師は、このような発言を生徒（児童）がするように誘導してはいけない。

上のような読み解きに収斂することが、「正解」では無い。

生徒（児童）のひとりひとりが自分の考えを持つことが、「正解」である。

人は、死を含む深刻な出来事に出会うと、合理的な考えのみでは心をおさめられなくなる場合がある。

道徳的・宗教的・超越的・霊的なさまざまな考えを引き寄せて、考えて見る必要が生まれることがある。

道徳授業としては、教師は、生徒（児童）から出るかもしれない、すべての発言（あるいはまとめのノート発言）を受容的に受け止める必要がある。

参考資料：梅原猛『法然の哀しみ 上・下』小学館文庫、2004年

末木文美士『日本仏教史』新潮文庫、1996年

後注：本稿は、藤井英之先生・下田喜久恵先生をはじめとする有田市立宮原小学校の先生方との議論に負うところがあります。なお誤りがある場合は、すべて宮崎に責任があります。